

神 道 遺 跡

— 第 18 次 調 査 —

久留米市文化財調査報告書 第154集

1999

久留米市教育委員会

序

筑後川がもたらす水と水縄山地から広がる緑に恵まれ、交通の要所でもある久留米市は、奈良・平安時代には筑後国府・国分寺がおかれ、江戸時代は筑後国の北半部を領した有馬氏の居城久留米城を中心とした城下町となるなど、筑後地方の政治・経済・文化の拠点都市として発展を続けています。

本書で報告する神道遺跡第18次調査地点は、久留米市東部の御井旗崎1丁目に所在していますが、調査地周辺は昭和50年度以来の東部土地区画整理事業を基に開発が進められ、市内でも最も開発が著しい地区の一つとなっています。

神道遺跡の調査はこの区画整理事業を契機として始まり、昭和56年度の第1次調査以来、既に17地点の調査を行い、縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代にこの地区で暮らした人々の営みがうかがえる貴重な遺跡であることが判明しています。

今回の第18次調査は、共同住宅の建設を原因とした事前の発掘調査であります。その成果を収録した本書が、文化財の理解・普及のため学校教育や生涯教育の教材として、また、学術資料の一つとして、広く活用いただければ幸いです。

今回の発掘調査に際し、ご理解・ご協力をいただきました地権者 〇〇〇氏を始め、関係各位に対しまして、ここに厚く御礼申し上げます。

平成11年6月30日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例言

1. 本書は、久留米市御井旗崎1丁目に所在する神道遺跡第18次調査の記録である。調査は共同住宅建設工事を原因とする事前の調査であり、発掘調査から報告書作成に至る費用は 〇〇〇氏が負担した。
2. 発掘調査は、〇〇〇氏と久留米市教育委員会との委託契約に基づき、久留米市教育委員会が主体となって実施したもので、教育文化庁文化財保護課の水原道範が調査を担当した。
3. 本書に掲載した図面は水原の他、大石昇・香月清子・小林美佐代・梶島ミドリ・今村美津子が作成し、遺物の実測と図面の浄書は畠中和子・米澤美詠子・小澤知美が行った。写真撮影は水原が行った。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成しており、図中の方位はすべて座標北を示す。また、本書で使用した遺構の略表記は次のとおりである。

SI……堅穴住居 SK……土坑 SP……ピット

5. 今回の調査に係る諸資料は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
6. 神道遺跡第18次調査の遺跡調査番号は199833であり、遺物一覧表で示す5桁の遺物番号は遺跡調査番号を省略して表記した。
7. 本書の執筆・編集は水原が担当した。

I. はじめに

1. 調査に至る経過

神道遺跡第18次調査は、平成10年10月2日に地権者■■■■氏より、久留米市御井旗崎1丁目1307-4番地における埋蔵文化財包蔵地の確認依頼書が提出されたことに始まる。対象地は神道遺跡の南西部に位置し、遺構・遺物の存在が予想されたが、対象地の近辺は未調査であったため、遺構の状況を把握することを目的として対象地に2本のトレンチを設定し、試掘調査を行なった。その結果、歴史時代のビットなどが存在することを確認した。この成果を受けて地権者と協議を重ね、平成11年2月～3月に対象面積981㎡のうち、建物が建設される東半部の252㎡分について発掘調査を実施し、平成11年度に整理作業・報告書作成を行なうことで協議が成立した。

それを受けて、平成10年12月5日に発掘調査の依頼と文化財保護法第57条の2項による発掘届が提出された。平成11年1月22日には神道遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年2月2日より現地の発掘調査を開始した。

整理作業については平成11年4月16日に委託契約を締結し、同年6月30日まで実施している。

2. 調査体制

今回の調査に係る組織体制は以下のとおりである。

調査委託：■■■■

調査主体：久留米市教育委員会

教育長	桑野 善吾
教育文化部長	坂田 博春
社会教育担当部長	矢次 敏孝（平成11年3月まで）
社会教育担当次長	芳司 定（平成11年4月から）

調査総括：教育文化部文化財保護課

課長	古賀 幸男
主査	萩原 裕房（平成11年3月まで）
課長補佐兼主査	萩原 裕房（平成11年4月から）
文化財主査	松村 一良
	富永 直樹

調査庶務：古賀 直喜（平成11年4月まで）

権藤 節子（平成11年5月から）

調査担当：水原 道範

整理担当：畠中 和子

発掘調査臨時職員：今村 美津子・岡 富士子・山下 久枝・山田 治代・良永 洋子・野嶋 良枝・

梶島 ミドリ・中野 芳子・柳 鈴子・福田 ふくみ・良永 美佐子・中野 悦子・柴田 友子・

小林 美佐代・香月 清子・秋山 アヤ子・川原 キツ子

出土品整理臨時職員：奥園 美穂

Ⅱ. 位置と環境

神道遺跡は久留米市北東部、水縄山地西端の高良山麓から延びる低位台地上に立地する。遺跡の標高は11～14mを測り、遺跡が所在する台地は南側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。この台地は高良山北麓から筑後川へ北流する多数の小河川によって細分される。神道遺跡は西を中谷川、東も小河川によって挟まれ、現段階で東西約250m、南北約360mの範囲に展開する遺跡で、奈良～平安時代の集落遺構を中心として、縄文・弥生時代、中世・近世に及ぶ良好な遺構・遺物の存在が知られている。神道遺跡の周辺は市内でも有数の遺跡が集中する地域であることから、既に発掘調査も多数実施されており、以下その成果を簡単に記す。

旧石器時代の資料は二本木遺跡・安国寺遺跡・野口遺跡から若干のナイフ型石器や細石刃などが発見されているに過ぎない。縄文時代になると遺跡数は増加し、早・前・晩期の横道遺跡、中期～晩期のヘボノ木遺跡、後期の西小路遺跡、草創～中・晩期の安国寺遺跡、早期の松ヶ本遺跡、前期～後期の野口遺跡があり、神道遺跡では後期の甕棺墓1基と溝1条、多数の土器・石器が発見されている。

弥生時代の遺跡は集落遺跡として、後期の古宮遺跡、中～後期の朝妻遺跡・ヘボノ木遺跡、中期の二本木遺跡・篠田遺跡、前～中期の新府遺跡、前期の新婦遺跡があり、基地は甕棺墓とその祭祀の状況が窺える貴重な資料が得られた中期の安国寺甕棺墓群や、後期の西小路遺跡がある。神道遺跡では前期末～中期初頭の甕類が出土した土坑2基の存在が知られている。

古墳時代の遺跡は少なく、前期の松ヶ本遺跡が知られる程度である。

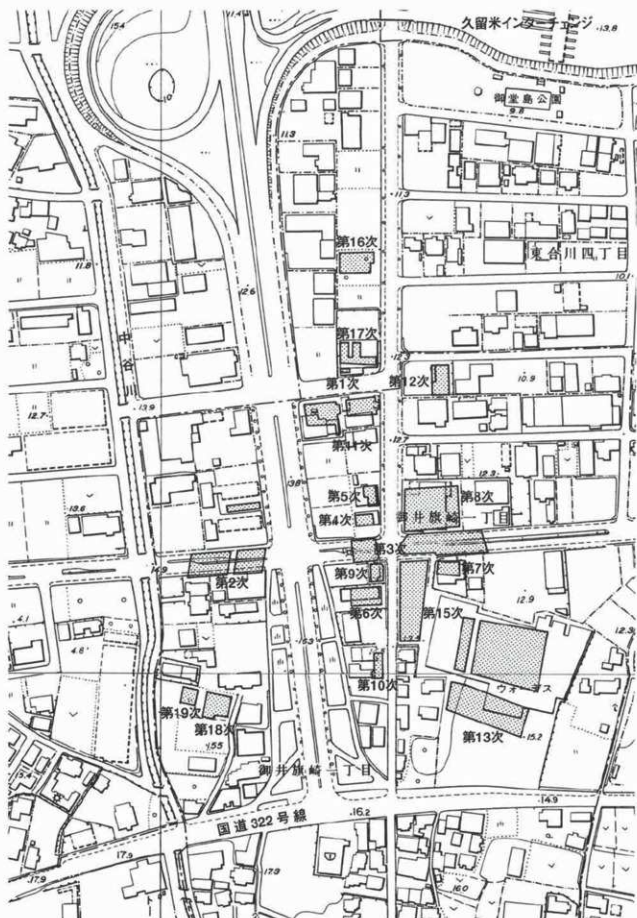
奈良～平安時代の遺構・遺物は第1図に掲げたほとんどの遺跡で認められる。中心となる筑後国府跡の政庁推定地が合川町から朝妻町、御井町へ移転することから、国府と関連官衙の遺構がその周辺に展開する他、神道遺跡・御堂島遺跡・下見遺跡では集落群の存在が知られている。

中世になると、高良山の宗教勢力に関係した人々の営みを伝える遺跡が山麓の御井町近辺に集中する傾向が見られる。神道遺跡では井戸の他に顕著な遺構は現在のところ発見されていないが、北側に隣接する下見遺跡では、鎌倉時代の有力者の屋敷と推定される「コ」の字型に配置された建物群や区画溝などが検出されている。近世には御井町が薩摩坊ノ津街道の府中宿として繁栄したが、その他は農村地帯となっていた。

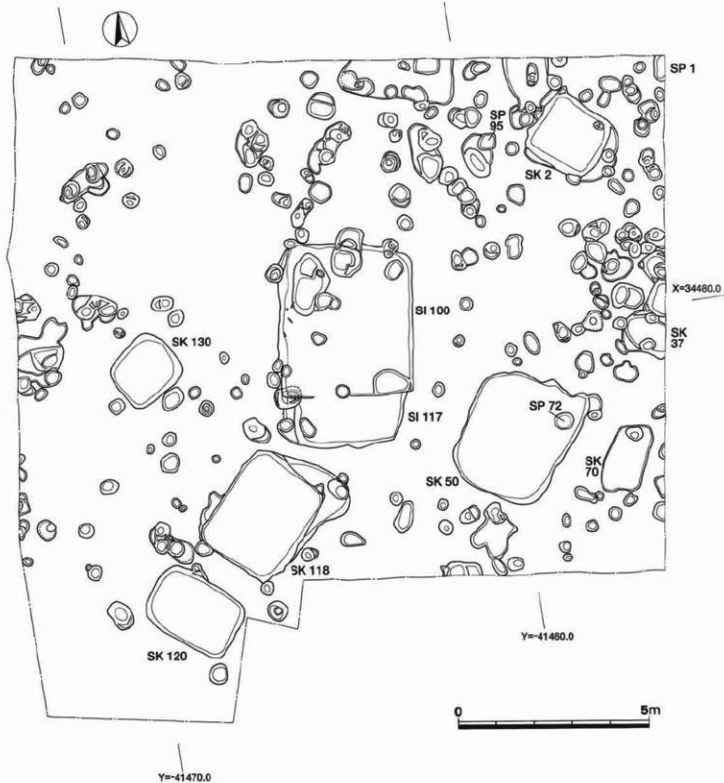


第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. I期政庁 (古宮)
2. II期政庁 (枝光)
3. III期政庁 (朝妻)
4. IV期政庁 (横道)
5. 二本木遺跡
6. 篠田遺跡
7. 神道遺跡
8. ヘボノ木遺跡
9. 御堂島遺跡
10. 下見遺跡
11. 西小路遺跡
12. 安国寺遺跡
13. 松ヶ本遺跡
14. 野口遺跡



第2図 遺跡の周辺地形及び調査地点位置図 (1/2,500)



第3圖 神道遺跡第18次調査遺構配置図 (1 / 100)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

今回の第18次調査地は神道遺跡の南西部に位置する。調査地のすぐ西側を中谷川と呼ばれる小河川が北流し、対岸がヘボノ木遺跡の南東部となる。第2図に見られるとおり、現在中谷川は区画整理事業によって直線的な流路に変更されているが、区画整理前には調査地の付近で北東側に曲がり、第14次調査地付近へと流れていた。

先に述べたとおり、調査地周辺では今まで調査例がないことから、試掘調査の成果を手がかりに、協議によって決定した 238㎡分の調査区を設定し、平成11年2月2日に重機による表土剥ぎから調査を開始した。表土剥ぎが終了した段階で、歴史時代の遺構の他に縄文時代の包含層も良好な状態で残っていることが判明。さらに、弥生時代の土坑の存在も判明したため、調査区南西部を人力と重機を使用し、調査区を南西側へ拡張して調査を進め、最終的には 252㎡分を調査した。

調査期間の前半は比較的好天に恵まれたものの、後半は天候不順で、雨の中作業を強行する日が続き、3月9日に調査を終了している。

なお、縄文時代の包含層については、種々の制約により第18次調査では掘り下げを行っていない。これを補足するため地権者の承諾を得て第18次調査区の西側、駐車場部分となるため第18次調査の対象から除外した部分において、第19次調査として国庫補助事業による調査を実施している。

第18次調査の出土品整理作業については、平成11年5月1日～6月30日の期間で行なっている。

以下、調査日誌から抜粋する。

2月2日 神道遺跡第18次調査開始。重機による表土剥ぎ開始。

8日 表土剥ぎ続き。午後より作業員を動員し、発掘機材の搬入・壁切り・土壌作り・遺構検出等の作業を行なう。

9日 表土剥ぎ終了。遺構検出作業続き。試掘調査の際には明に出来なかった、縄文時代の包含層が良好に残ることが判明し、対策を協議する。

10日 遺構検出作業を終え、東端部より遺構の掘り下げを開始。

16日 掘り下げ続き。ヘボノ木遺跡の基準点より座標を移動し、割り付けを行なう。以後はカタシステムと手描きによる遺構の実測作業を進める。

19日 掘り下げの最終段階に来て、弥生時代の土坑（SK 120）がごく一部のみ検出されていたことが判明。急ぎ人力で調査区の拡張を行なう。

25日 SK 120の全容をようやく検出。掘り下げ。

3月1日 SK 118・120掘り下げ続き。遺構配置図の作成が一段落し、エレベーション作業を開始。

2日 調査地の東側に所在するビルの屋上を借りて、調査区の全景写真を撮影。SK 50の遺物取り上げを開始。SK 118遺物出土状況実測。

6日 SK 118の実測終了。SK 50遺物取り上げ終了。

8日 重機を入れSK 120の周辺を拡張し、柱穴を検出。掘り下げ、実測、写真撮影を行なう。調査区北側から埋め戻しを開始。

9日 発掘機材を散収。重機による埋め戻しを終了し、神道遺跡第18次調査終了。

2. 検出遺構と遺物

a) 調査区の土層

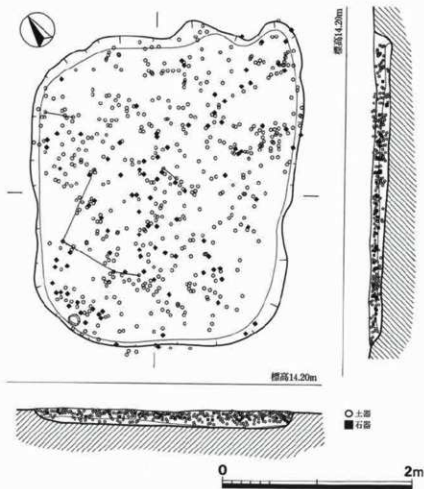
現表土から調査区西部では約 100cmの深さで遺構検出面に達するが、遺構検出面は調査区北東部へ向かって緩やかに傾斜し、調査区北東端部では 120cmの深さとなる。調査区北東端部における層序は、耕作土 (25cm)、床土 (15cm)、多量の小礫が混入する褐色土 (20cm)、暗褐色土 (35cm)、黒色土 (25cm) を経て、遺構検出面の茶色土となるが、この茶色土は縄文時代後～晩期の遺物を包含する。

b) 検出遺構

調査の結果、縄文時代の土坑 1 基、弥生時代の土坑 2 基、奈良時代の竪穴住居 2 軒、平安時代の土坑 4 基、ピット群などが検出され、縄文土器・石器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器など、コンテナ12箱分に及ぶ多彩な遺物が出土した。



第4図 神道遺跡第18次調査全景 (東から)



第5図 SK 50 実測図 (1/40)



第6図 SK 118遺物出土状況(東から) 土器は北東部と南西部から集中して出土し、甕類の他、丹塗りされた壺が出土した。これらの土器は二次的に被熱して赤黒く変色し、著しく器表面が損傷したものが多いが、その中には二次的に被熱していないものも見られる。これらのことから、貯蔵穴として機能していたこの土坑が火災を受けた後もしばらくの間は廃棄土坑として利用され、最終的に埋め戻されたものと推定される。

c) 縄文時代の遺構

土坑

SK 50 (第5・19図) 調査区南東部で検出した土坑。平面形は楕円形を呈し、長軸 3.2m 短軸 2.8m、深さは約20cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、北側へ向かってわずかに傾斜しており、南西部には直径20cm、底面からの深さ25cmのビツを有する。

埋土は暗褐色土の一層のみであるが、埋土中からは流れ込みと判断される縄文土器・石器が多量出土している。

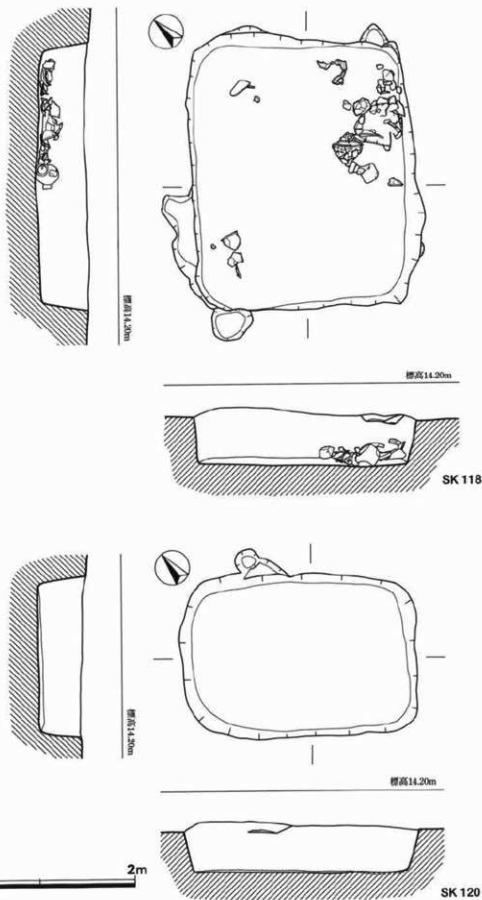
d) 弥生時代の遺構

土坑

SK 118 (第6・7・9図) 調査区南部で検出した土坑。長辺 2.9m、短辺 2.4mを測り、平面形は長方形を呈する。深さは50cm。底面は平坦である。

平面形から判断すれば、SK 118は当初南半部が先に掘り込まれ、その後北側へ掘り広げて、検出された規模となったものと想定される。

埋め戻しは黒色土・褐色土によって一度になされるが、底面付近には厚くワラ状の炭化物や焼土、底面直上では炭化米が多量検出された。炭化米は長さ5mm前後、幅3mm前後の短粒のものである。また、土坑の周囲にはこの土坑に伴うと見られる直径40cm前後、深さ40cm前後を測る柱穴が存在することから、貯蔵穴の上部にワラなどで葺いた屋根や蓋などの施設が存在し、それが火災により焼失した可能性が高い。



第7圖 SK 118・120実測図 (1/40)



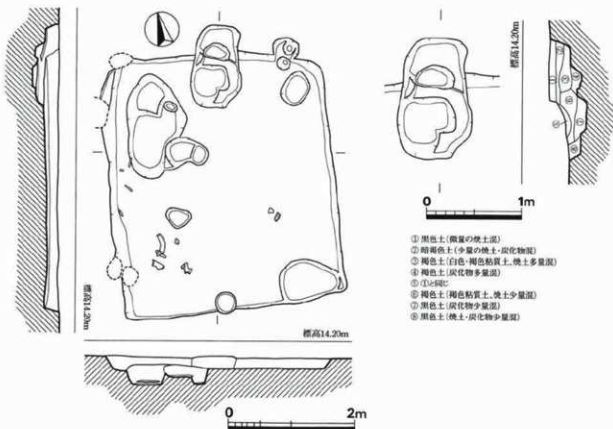
第8図 SK 120 (南西から)



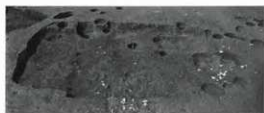
第9図 SK 118・120 (北東から)

SK 120 (第7～9図) SK 120の約80cm南側で検出し、調査区を拡張して全容を検出した土坑である。長辺 2.5m、短辺 1.7m、深さ50cmを測り、平面形は長方形を呈する。底面は平坦となり、ピットなどは検出されていない。SK 120も周囲にこの土坑に伴うと見られる柱穴が存在する。埋土は黒色土・褐色土で一度に埋め戻されているが、底面から約5cm程は炭化物和焼土が多量混入した褐色土が見られる。さらに、南壁西寄りの壁面は焼土化していた。遺物は北西部に集中し、甕・高坏が出土している。

SK 118・120は、SK118の短辺とSK120の長辺を揃えて掘られたその位置関係や、出土遺物の時期などから、弥生時代中期後半のある時期に並存していた可能性が高い。



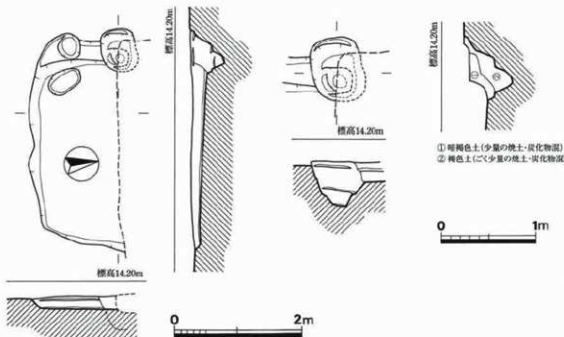
第10図 S I 100実測図 (1/60・1/40)



第11図 S I 100・107 (東から)

されず、主柱穴も明確ではないが、北西隅と南東隅の部分において、床面からの深さがそれぞれ30cm、15cmの土坑を検出した。但し、その内部からは、北西隅の土坑において土師器甕口縁部細片が出土したのみである。床面では土師器甕・鉢口縁部片が出土した他、西側壁面寄りの部分から不明鉄製品1点、鉄鏝1点、鉄鎌1点が出土した。

カマドは北壁中央部に設けられるが、完全に破壊されていた。埋土中に多量の青灰色粘土や焼土のブロック土が検出されたことから、北壁を約20cm北側へ掘り込み、袖部と天井部を粘土で作り付けたカマドと推定される。カマド内部もカマドを破壊する際に掻き出したものらしく、カマド前面の床面一帯に焼土・炭化物が散布していた。カマド内の埋土中からは、土師器甕の口縁部片が1点出土したのみであった。



第12図 S I 117実測図 (1/60・1/40)



第13図 S I 117カマド完形状況(東から)

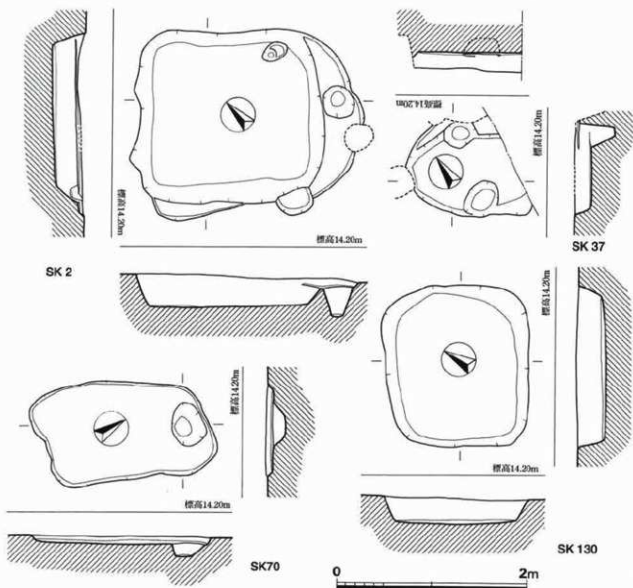
S I 107 (第12・13図) 調査区中央部で検出。後出する S I 100によって北半部が失われるが、東西 3.2m、南北は 1.5m分が残存する。残されたカマドの位置から復元すれば、南北 2.8mとなり、平面形はほぼ正方形を呈していたものと推定される。深さは20cmを測り、この竪穴住居も床面が硬化した状況は認められず、遺物は土師器細片が4点出土したのみである。

カマドは西壁に設けられ、西壁と床面を掘り込んだ後、粘土を貼り付けて作られたものと想定されるが、カマドを完全に破壊した後、粘土などは別の場所に廃棄されたらしく、カマドの埋土中にのみ僅かに焼土と炭化物が認められるに過ぎない。カマド内からは土師器細片が1点出土したのみである。

C) 歴史時代の遺構

竪穴住居

S I 100 (第10・11図) 調査区の中央部で検出。南北 3.8m、東西 3.2mの規模を有し、平面形は長方形となる竪穴住居である。残存する深さは約40cmを測る。床面では硬化面は検出



第14図 SK 2・37・70・130実測図 (1/40)

土坑

SK 2 (第14・15図) 調査区北東部に検出した土坑。平面形は一辺 1.8m のほぼ方形を呈し、深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形状となる。壁面は黄褐色土ブロックを僅かに含む埋土で一度に埋め戻され、埋土中からは土師器片13点、須恵器片4点、黒色土器A類細片2点の他、弥生土器9点、縄文土器 345点、黒耀石剥片51点、サヌカイト剥片4点が出土した。



第15図 SK 2 (南から)

出、南北幅は90cmを測る。深さは30cm。底面はほぼ平坦となる。埋土は黒色土による一括埋土で、埋土中からは、土師器細片88点、弥生土器1点、縄文土器片1点、黒耀石剥片4点、焼粘土塊1点が出土している。

SK 37 (第14図) 調査区東部に検出。遺構は調査区外へ延びているため規模は明確ではないが、東西長 1.1m分を検



第16図 SK 130 (南から)

SK70 (第14図) 調査区東部で検出した土坑である。

長軸 1.7m、短軸40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北端部に直径40cm、底面からの深さ15cmのビットが掘られている。遺物は土師器細片12点、黒色土器A類細片1点、縄文土器88点が出土したが、ビット中からは遺物は全く出土していない。

SK 130 (第14・16図) 調査区西部で検出した。平面形が一辺1.8mの方形を呈し、深さは40cmを測る。底面は平坦で、断面は逆台形状となる。埋土は黒色土中に多量の黄色土ブロックを多量含む土で一度に埋め戻され、埋土中からは土

師器破片10点、縄文土器片52点が出土した。

ビット

SP1 調査区北東隅で検出したビット。遺構は調査区外へ延びているが、南北60cm分、東西20cm分を検出。深さは20cm。埋土は黒色土で、埋土中から土師器鉢1点と同細片8点が出土した。

SP44 調査区東部で検出。長軸80cm、短軸50cm、深さ15cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は黒色土で、埋土中から土師器杯1点、縄文土器深鉢1個体分が出土。

SP72 SK50北東部に掘り込まれた直径50cm、深さ20cmを測るビットである。土師器碗1点、同細片7点、縄文土器細片21点が出土した。

SP95 調査区北部で検出。長軸60cm、短軸50cm、深さ40cmを測り、平面形は楕円形気味となる。土師器杯1点、高坏脚部細片1点の他、土師器細片64点、縄文土器片8点が出土した。

SP 202 調査区南西部で検出。直径40cm、深さ30cmを測る円形のビットである。土師器杯片1点、縄文土器片2点、サヌカイト製のポイント1点が出土。

F) 出土遺物

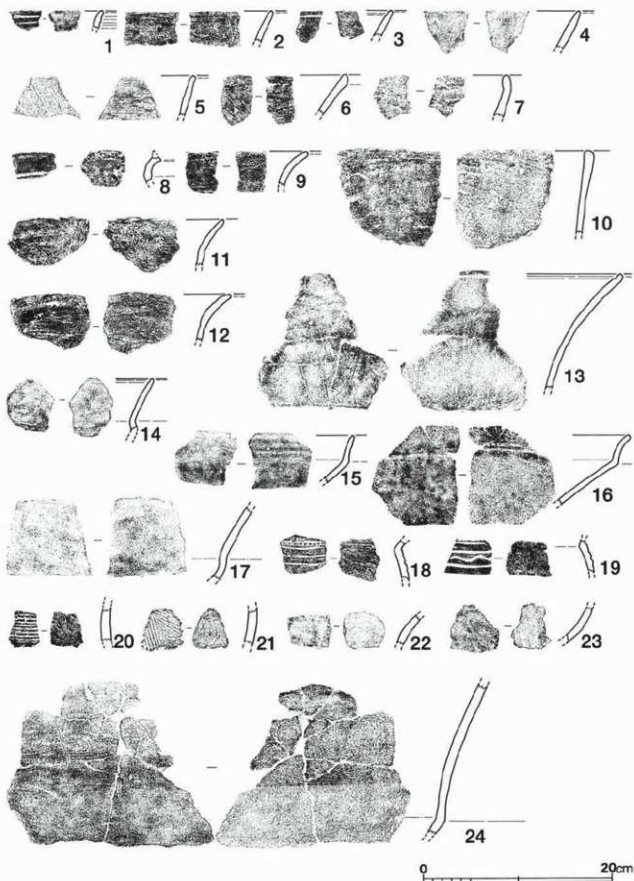
第18次調査ではパソコンテナー12箱分に及ぶ遺物が出土した。その内容は縄文土器・石器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器A類、鉄製品である。出土量はSK50を中心として出土した縄文時代の遺物が最も多く、次いで土師器、須恵器、弥生土器、黒色土器A類、鉄製品の順となる。

縄文土器は後期の三万田式に比定されるものが大半を占めるが、SK50出土品では他に西平式の土器が見られ、包含層上面やビットに混入した縄文土器の中には、晩期初頭と見られる土器も出土した。また、石器では片岩製の円盤状製品が6点出土したことが注目される他、SI 100への混入品であるが、片岩製の十字型石製品が1点出土した。十字型石製品は第19次調査においても数点出土している。黒曜石製品は剥片が多く、石器は少ない。そのほとんどが佐賀県腰岳産と見られるが、SK 118・130への流入品に各1点のみ大分県姫島産と見られる剥片が出土している。

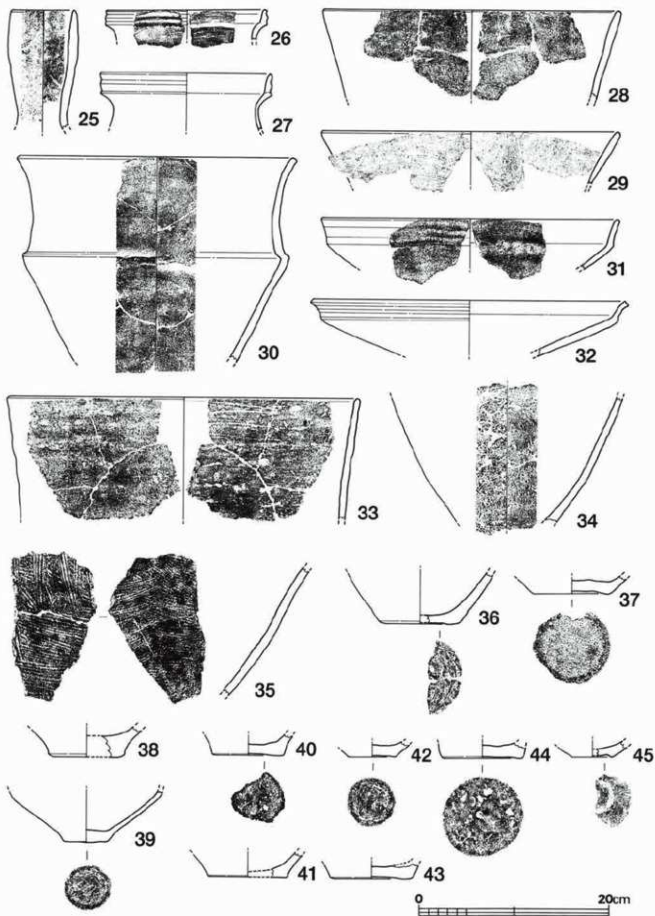
弥生土器はSK 118・120出土品を除けば、SK 2・37やビット中から出土した流入品に16点の細片が出土した。その内の8点が丹塗りされている。

土師器・須恵器・黒色土器A類については、細片の個体数は多いものの、器種については杯・碗・甕にはほぼ限定される。

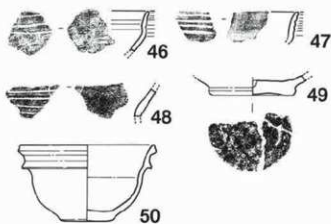
以下、遺物の詳細については、遺物一覧表を参照されたい。



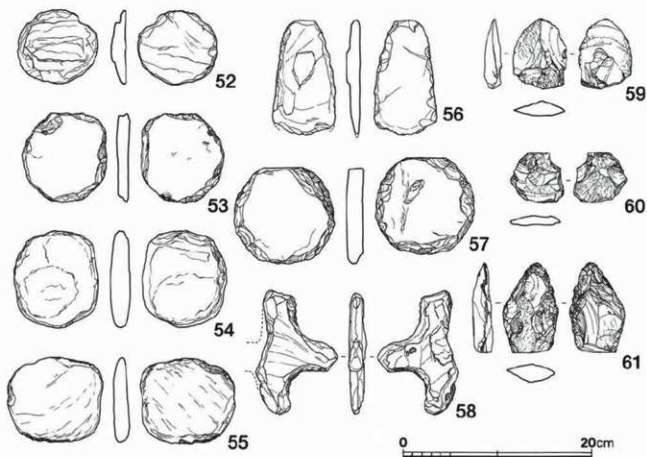
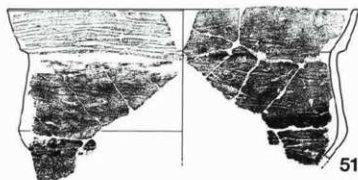
第17圖 SK50出土土器実測図① (1/4)



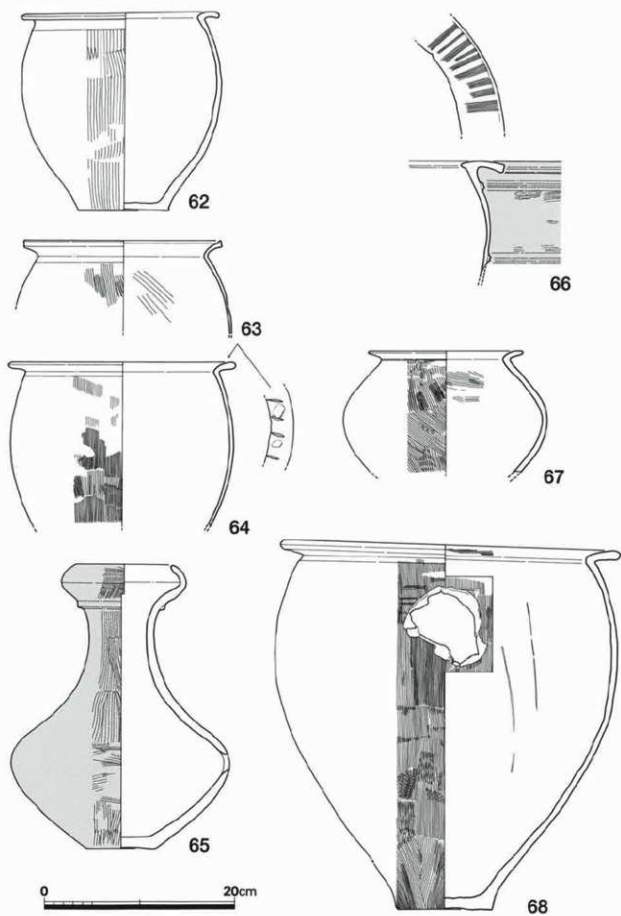
第18图 SK50出土土器实测图② (1/4)



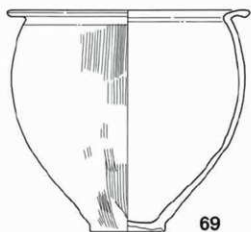
第19図 SK 50 遺物出土状況
(西から)



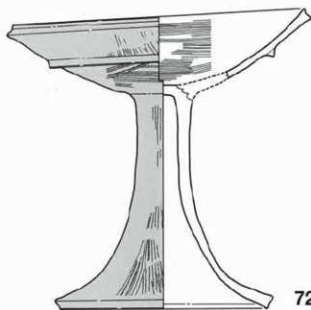
第20図 包含層・ピット・SK50出土土器・石器実測図 (1/4)



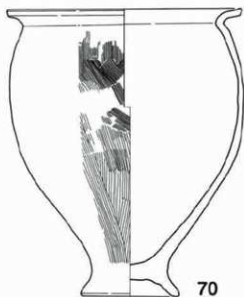
第21圖 SK 118出土土器実測図 (1 / 4)



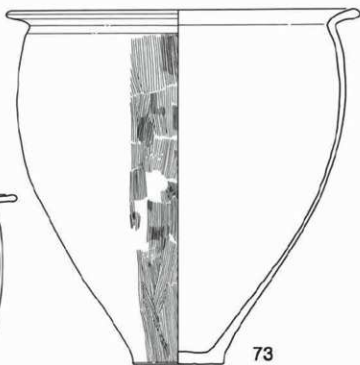
69



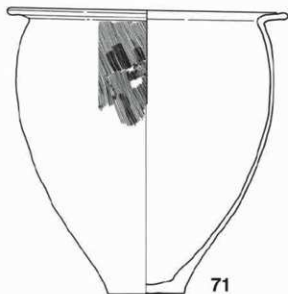
72



70



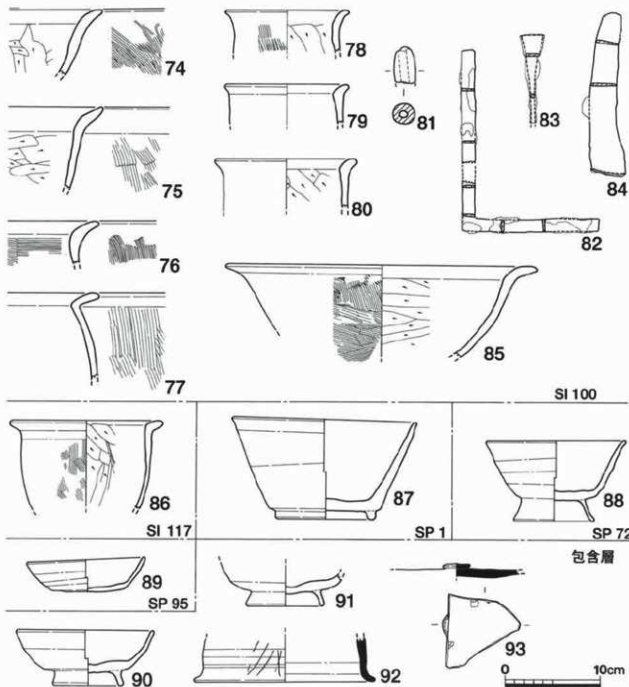
73



71



第22図 SK 120出土土器実測図 (1/4)



第23図 SI 100・107、SK 2・130、ビット群出土遺物実測図 (1/4)



第24図 SI 100鉄製品出土状況 (西から)



第25図 SI 100鉄鎌出土状況 (西から)

遺物No	出土遺構	種別	器形	法		色		調		胎土	焼成	備考	登録番号
				口徑(㎝)	底径(㎝)	外面	内面	外面	内面				
1	SK50	縄文土器	鉢			(1.9) 暗褐色	褐色	ミガキ	ミガキ	多量の細砂粒	良好		00252
2	※	※	※			(3.3) 褐色 黒色	黒色 褐色	ナデ	※	多量の砂粒	※		00253
3	※	※	※			(2.8) 赤褐色 黒色	赤褐色 黒色	ミガキ	※	多量の細砂粒	※		00254
4	※	※	※			(4.0) 黒褐色	黒色	ナデ	※	※	※		00255
5	※	※	※			(4.3) 褐色	暗褐色	ミガキ	※	少量の砂粒	※		00256
6	※	※	※			(4.2) 暗茶褐色	黒褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	※	※		00257
7	※	※	※			(4.45) 暗褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	※	※		00258
8	※	※	※			(2.8) 褐色	褐色	ミガキ	※	多量の砂粒	※		00259
9	※	※	※			(3.6) 褐色 黒色	褐色 黒色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	少量の細砂粒	※		00260
10	※	※	浅鉢			(8.6) 暗褐色	灰褐色	※	ナデ	多量の砂粒	※		00261
11	※	※	※			(4.8) 淡褐色	褐色	ナデ	ナデ	※	※		00262
12	※	※	※			(4.9) 褐色	褐色	※	ナデ ケズリ	多量の細砂粒	※		00263
13	※	※	※			(12.1) 暗茶褐色 褐色	暗灰色	ナデ	ヨコナデ	※	※	外面スス付着	00264
14	※	※	※			(5.1) 暗褐色	黒色	ミガキ	ミガキ	※	※	※	00265
15	※	※	※			(5.0) 黒褐色	淡褐色	※	※	※	※		00266
16	※	※	※			(7.3) 淡褐色 灰色	褐色	ナデ	ナデ	多量の砂粒	※		00267
17	※	※	※			(7.7) 淡褐色	暗褐色 黒褐色	ミガキ	ナデ	多量の細砂粒	※		00268
18	※	※	※			(4.2) 黒色	淡褐色	ミガキ	ナデ	※	※		00269
19	※	※	※			(3.5) 褐色	淡灰褐色	ミガキ	ナデ	多量の微砂粒	※		00270
20	※	※	鉢			(3.3) 淡茶褐色	黒色	ナデ	ナデ	※	※		00271
21	※	※	※			(4.1) 茶褐色	暗褐色	桑灰	ナデ	多量の細砂粒	※		00272
22	※	※	細片			(2.8) 暗褐色	暗灰色	ナデ ミガキ	ミガキ	※	※		00273
23	※	※	※			(3.8) 褐色	暗茶褐色	ミガキ	ナデ	多量の微砂粒	※		00274
24	※	※	鉢			(15.5) 暗褐色 黒色	褐色	ミガキ	ナデ ミガキ	多量の砂粒	※		00275
25	※	※	不明	6.8		(12.0) 黄褐色	灰色	ナデ	ナデ	※	※		00276
26	※	※	鉢	(16.8)		(3.1) 黒褐色	黒褐色	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	多量の細砂粒	※		00277
27	※	※	※	(18.0)		(5.7) 褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	※	※		00278
28	※	※	鉢	(31.0)		(9.3) 暗褐色	灰褐色 褐色	ナデ 押え	ナデ 押え	1~5mmの砂粒 多量	※		00279
29	※	※	浅鉢	(31.0)		(5.5) 暗茶褐色	黒色 褐色	ミガキ	ミガキ	少量の砂粒	※		00280
30	※	※	鉢	(29.0)		(21.5) 黒褐色 暗茶褐色	茶褐色 暗茶褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ	多量の細砂粒	※	内外面スス付着	00281
31	※	※	浅鉢	31.0		(4.3) 淡褐色	暗褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	多量の微砂粒	※		00282

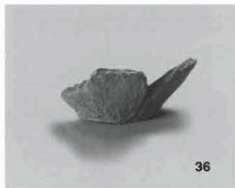
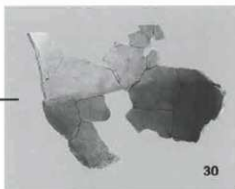
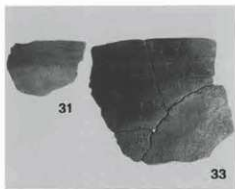
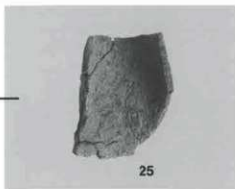
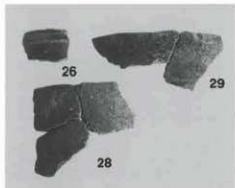
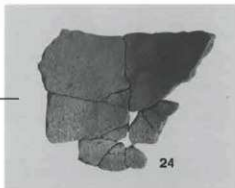
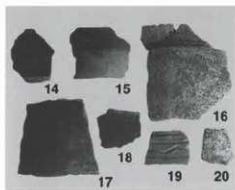
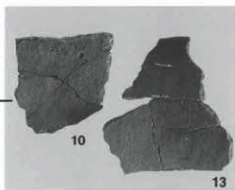
第1表 出土遺物一覧表

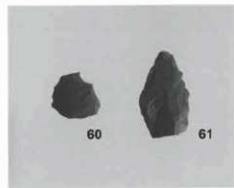
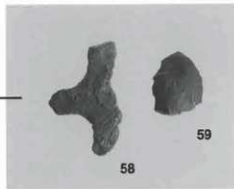
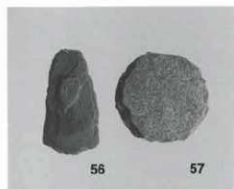
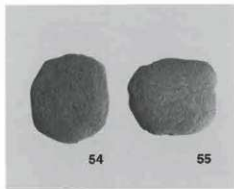
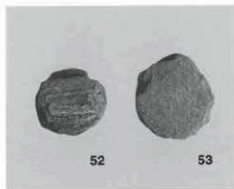
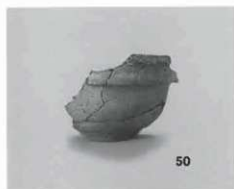
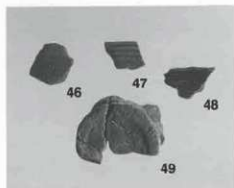
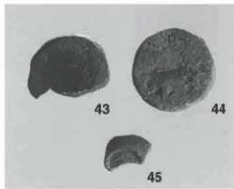
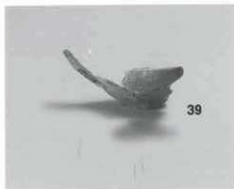
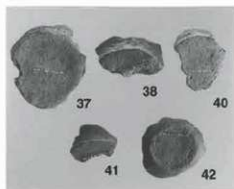
遺物No	出土遺構	種 別	器 形	法 量		色 調		調 整		胎土	焼成	備 考	登録番号
				口径(底径)mm	高さ(厚)mm	外面	内面	外面	内面				
32	S K 50	縄文土器	浅鉢	33.0	(5.8)	黒色 褐色	褐色	ミガキ	ミガキ	多量の細砂粒	良好		00283
33	※	※	鉢	37.0	(12.9)	暗褐色 黒色	※	ナデ ミガキ	ナデ	2～7mmの砂粒 多量	※	外面スス付着	00284
34	※	※	※		(13.3)	※	暗褐色	ナデ	ナデ	3～7mmの砂粒 多量	※		00285
35	※	※	※		(6.8)	暗褐色	褐色	条痕	条痕	多量の砂粒	※		00286
36	※	※	鉢		8.6	(5.3)	褐色	※	ミガキ ナデ	ナデ	※	※	00287
37	※	※	※		8.0	(1.8)	灰色 褐色	灰白色	ナデ	※	※	※	00288
38	※	※	※		8.0	(2.9)	褐色 褐色	黒色	※	※	※	※	00289
39	※	※	※		4.6	(6.0)	黒褐色	褐色	ミガキ	ミガキ	※	※	00290
40	※	※	※		7.5	(2.1)	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	多量の細砂粒	※	00291
41	※	※	※		8.4	(2.3)	暗褐色	暗褐色	※	※	※	※	00292
42	※	※	※		4.6～ 5.0	(1.25)	褐色	灰色	ナデ ミガキ	※	※	※	00293
43	※	※	※		8.6	(1.4)	淡褐色	暗褐色	※	※	※	※	00294
44	※	※	※		8.4～ 8.6	(1.6)	褐色	※	ナデ	※	多量の砂粒	※	00295
45	※	※	※		4.2	(1.0)	褐色	※	※	※	多量の細砂粒	※	00296
46	包含層上面	※	浅鉢		(4.3)	褐色	褐色	ミガキ	※	※	※	※	00297
47	S K 50	※	※		(3.1)	暗褐色 褐色	灰色 褐色	ナデ	※	※	※	※	00298
48	包含層上面	※	※		(2.9)	暗褐色 褐色	淡褐色	※	※	※	※	※	00299
49	※	※	※		9.0	(1.7)	明褐色	暗灰色	ナデ ミガキ	※	多量の微砂粒	※	00300
50	※	※	鉢	(14.6)	5.5～ 5.6	8.0	褐色 黒色 暗褐色	※	※	※	※	※	00301
51	S P 44	※	※	(37.0)	(16.0)	暗褐色 黒色	褐色	ミガキ	ケズリ ミガキ	※	※	※	00302
52	S K 50	片岩	円盤形 石製品	3.8	4.2	0.3～ 0.7							00303
53	※	※	※	4.7	4.5	0.6							00304
54	※	※	※	5.1	4.5	0.6～ 1.2							00305
55	※	※	※	4.5	4.9	0.7							00306
56	※	緑泥片岩	石斧	6.0	1.3～ 3.3	0.7							00307
57	S K 2	片岩	円盤形 石製品	5.0	5.2	0.8							00308
58	S I 100	※	十字型 石斧	6.6	1.7～ 3.7	0.9							00223
59	包含層上面	サヌカイト		3.8	2.6～ 2.8	0.9							00309
60	※	※		2.6	2.6	0.5							00310
61	S P 212	サヌカイト		4.7	2.9	0.9							00243
62	S K 118	弥生土器	甕	30.2～ 31.2	9.4～ 9.8	21.0	淡褐色 黒斑	淡褐色 灰色	ヨコナデ ハケ目	ナデ 押え	多量の微砂粒	良好	00228

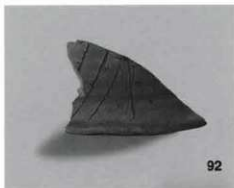
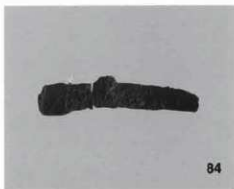
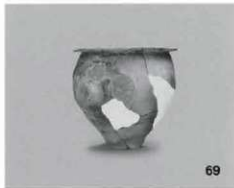
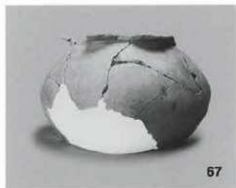
第2表 出土遺物一覧表

遺物No	出土遺構	種 別	器 形	法 量		色 調		調 査		胎土	焼成	備 考	登録番号
				口径(長径)	高さ(幅)	外面	内面	外面	内面				
63	SK118	養生土器	甕	20.5~29.8		(9.7)	淡褐色 黒色	淡褐色 褐色	ココナダ ハケ目	ナデ	多量の細砂粒	良好 二次被熱	00231
64	※	※	※	(23.6)		(17.4)	赤褐色	褐色	ココナダ ハケ目	ナデ	多量の砂粒	※ 二次被熱	00229
65	※	※	甕	13.0~13.1	7.0	29.5~29.6	赤褐色 黒斑	淡褐色	ミガキ	ナデ	多量の微砂粒	※ 丹塗	00226
66	※	※	甕	(37.0)		(12.0)	赤色	淡褐色	ミガキ	ナデ	少量の石粒	※ 丹塗	00227
67	※	※	甕	(16.2)		(12.9)	淡褐色 黒斑	※	ココナダ ハケ目	ナデ ハケ目	多量の細砂粒	※ 二次被熱	00232
68	※	※	甕	35.7~36.4	9.6~10.1	37.0~39.0	淡褐色 黒斑	褐色 灰色	ココナダ ハケ目	ナデ	少量の砂粒	※ 二次被熱	00230
69	SK120	※	※	(25.6)	(8.0)	(23.3)	褐色 黒斑	褐色	ハケ目	ナデ 押え	※	※ 二次被熱	00235
70	※	※	台付甕	24.9	10.8~10.5	30.0~30.4	暗褐色 黒斑	暗褐色	ココナダ ハケ目	ナデ	多量の細砂粒	※ 二次被熱	00237
71	※	※	甕	29.2~30.2	8.0~8.2	29.5~30.1	褐色 黒斑	褐色	ナデ ハケ目	ナデ	※	※ 二次被熱 外面多量のスス付着	00234
72	※	※	高坏	31.4~32.2	22.9	29.9~31.6	赤褐色	黒色 褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	3~7mmの石英 砂粒少量	※ 丹塗、二次被熱	00233
73	※	※	甕	35.2~37.2	9.5~10.0	37.2~38.1	淡褐色	褐色	ココナダ ハケ目	ナデ	多量の細砂粒	※ 二次被熱	00236
74	S1100	土師器	鉢			(7.3)	褐色	褐色	ココナダ ハケ目	ココナダ ヘラケズリ	少量の石英・ 雲母	※ 外面スス多量付着	00218
75	S1100 カマド内	※	※			(9.0)	暗褐色	褐色	ココナダ ハケ目	ケズリ	器量の石英・ 雲母	※ 内外面スス多量付着	00224
76	S1100	※	甕	(40.0)		(4.5)	淡褐色	淡褐色	ココナダ ハケ目	ココナダ ハケ目	多量の細砂粒	※ 外面スス付着	00217
77	※	※	※			(10.4)	明褐色 黒褐色	明褐色	ココナダ ハケ目	ナデ	※	※	00216
78	※	※	※	(13.0)		(4.5)	明褐色	暗褐色	ココナダ ハケ目	ケズリ	多量の微砂粒	※	00221
79	※	※	※	(13.0)		(4.1)	褐色	明褐色	ナデ	ケズリ	※	※	00220
80	※	※	※	(15.0)		(5.2)	暗褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ	※	※	00219
81	※	土製品	土鍾	(3.8)	2.3		淡褐色	淡褐色	ナデ		精良	※	00222
82	※	鉄製品	不明		1.3	1.5~2.0							00248
83	※	※	鉄鍾	9.2	0.4~2.6	2~4							00250
84	※	※	鉄鍾	16.3	2.2~3.5	1~2.5							00251
85	※	土師器	鉢	32.4~33.0		(10.2)	褐色 黒色	褐色	ココナダ ハケ目	ケズリ	少量の細砂粒	良好 内外面スス多量付着	00215
86	S1117 カマド内	※	甕	(16.0)		(9.3)	褐色	褐色	ココナダ ハケ目	ケズリ	多量の石英・雲母 赤色粒子	※ 内外面スス付着	00225
87	SP1	※	鉢	19.2	10.4~10.5	10.2~10.6	橙 黄褐色	褐色	ココナダ ヘラケズリ	ナデ ココナダ	多量の赤色粒子	※ 内底部スス多量付着 二次被熱	00002
88	SP72	※	甕	14.7~15.4	8.4	8.1~8.5	淡褐色 黒斑	淡褐色	ココナダ ヘラケズリ	ナデ ココナダ	多量の雲母・ 赤色粒子	※	00241
89	SP95	※	坏	12.4	7.5~7.8	3.0~3.55	淡褐色	淡褐色	ヘラ切り ココナダ	ナデ ココナダ	精良	※	00242
90	検出面	※	甕	14.4	(7.4)	5.7~5.8	淡褐色	淡褐色	ココナダ ヘラ切り	ナデ	※	※	00245
91	包着層	※	※		8.2~8.4	(4.6)	褐色	褐色	ココナダ	ナデ ココナダ	多量の赤色粒子	※	00246
92	※	須恵郡	円面碗		19.0	(4.6)	灰色	灰色	ココナダ	ココナダ	少量の石英・ 黒色粒子	※	00247
93	※	※	坏蓋		つまみ 2.8	(1.4)	灰色	灰色	ナデ	ナデ	少量の石英	※ 転用碗	00244

第3表 出土遺物一覧表







IV. まとめ

今回の調査は神道遺跡の南西部を調査し、竪穴住居2軒、土坑7基、ピット群を検出した。以下時期毎に概観し、まとめたい。

縄文時代

後期の三万田式を中心として、西平式や晩期初頭の遺物も若干出土した。神道遺跡全体では西平式・三万田式段階の遺物の出土例が多く、本調査地より約300m北東側に所在する第16次調査地点にまで及ぶ範囲で出土している。神道遺跡周辺においては、調査地の西側に隣接するヘボノ木遺跡や約600m北西側の西小路遺跡において後期の遺物が出土しているが、ヘボノ木遺跡では出土量が少なく、西小路遺跡では北久根山式、鐘崎式、西平式の土器が主に出土しており、現段階の資料では神道遺跡よりも先行するものと見られる。この3遺跡は湧水点や小河川に近接する高良山麓の低位台地上に所在し、恵まれた自然条件を背景に、縄文時代後期の生活域が展開していたことが窺われる。なお、神道遺跡では、この時期の遺構として甕棺墓1基と、遺跡の南西から北東へ延びる幅約2.5m、深さ40～60cmの規模を有し、中谷川上流方面からの水路であったと推定される溝が1条検出されている。

弥生時代

神道遺跡では前期末から中期初頭の土坑2基が検出されていたが、今回の調査で新に中期後半土坑SK 118・120の2基が検出された。神道遺跡周辺のこの時期の遺構としては、中谷川を挟んだ西側に広がるヘボノ木遺跡南部において、6軒の竪穴住居と5基の土坑が検出されている。ヘボノ木遺跡の土坑は竪穴住居に伴うものと見られ、丹塗り土器が竪穴住居・土坑共に多く出土すること、竪穴住居は散在し、全て焼失住居で、建て替えも見られず同時存在していた可能性が高いことが、既にヘボノ木遺跡第62次調査の際に指摘されている。今回の調査地は神道遺跡の調査地の中で最もヘボノ木遺跡に近接することや、土坑に掛けられていた屋根や蓋と推定される上部材が焼失していたこと、丹塗り土器が出土することなどの共通点から、SK 118・120はヘボノ木遺跡の南部に展開する集落の一部と見られ、この両土坑の周辺には関連する竪穴住居が存在することが想定される。また、焼失し、炭化米やワラと見られる炭化物、丹塗り土器が出土するなど、SK 118・120と同様な内容を持つ同時期の土坑としては、約400m西側の朝妻町で実施した筑後国府跡第69次調査SK 3163がある。

奈良・平安時代

竪穴住居SI 100・107、及び土坑SK 2・130を検出し、当該期の集落の広がりが捉えられた。SI 100・107については遺構の時期を明確に知り得る遺物は出土していないが、他の神道遺跡の検出例を参考とすれば、7世紀後半から8世紀代と見られる、SK 2・130については9世紀後半代と比定される。

これらの遺構はヘボノ木遺跡の消長と連動しながら、集落が形成・隆盛・衰退して行く神道遺跡の消長に沿う遺構と見られ、主に出土する土師器や須恵器が他の調査地に比べ、質量共に貧弱となることから、本調査地が神道遺跡に展開した集落の周辺部に当たるものと想定されよう。

参考文献

久留米市史編集委員会編『久留米市史 第12巻 資料編（考古）』1994

久留米市教育委員会編『ヘボノ木遺跡-第62次調査』久留米市文化財調査報告書 第121集 1996

久留米市教育委員会編『筑後国府跡・国分寺跡 昭和61年度発掘調査概要』1987

ふりがな	しんどう いせき だい18じちょうさ						
書名	神道遺跡 第18次調査						
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第154集						
編著者名	水原 道範						
編集機関	久留米市教育委員会						
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225						
発行年月日	西暦1999年6月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
神道遺跡	福岡県久留米市 御井旗崎1丁目 1307-4	40203	9511	33° 18' 36"	130° 33' 17"	1999.2.2 1999.3.9	252㎡ 共同住宅の 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
神道遺跡 第18次調査	散布地 生活地 集落跡	縄文 弥生 奈良～平安	土坑 1基 土坑 2基 竪穴住居 2軒 土坑 4基	縄文土器 石器 弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 鉄製品	神道遺跡の南西端部を調査。 縄文時代後～晩期の包含層が良好な状態で残ることや、ヘボノ木遺跡南部を中心とした弥生時代中期後半の遺構が、中谷川東岸側にも広がることが判明した。		

神道遺跡

—第18次調査—

久留米市文化財調査報告書 第154集

平成11年6月30日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編集 教育文化庁文化財保護課

TEL0942-30-9225

印刷 中央印刷株式会社